

摘録

○横山又次郎—遠別、惠代別油田の第三紀軟體動物 東京帝大理學部紀要第二類第一冊第七篇二三五頁以下

(Tertiary Mollusca from the Oil-Fields of Embets and Ebabets) 北海道の右の油田にて地質調査所技師植村氏の採集したる貝類の化石を調査した。植村氏によれば同油田の層序は上より一、第四紀層。二、第三紀層。三、白堊紀層にて第三紀層は更にA B C Dの四及び幌内層含炭層の都合六に分たれる。C Dに石油あり。化石はA B及びCの三層より出た。Aより十四種判定したが就中鮮新世の種の數が重きをなす。B層よりは六あり、やはり鮮新世と考へ得。C層よりは十六あり。此また鮮新と考へざるを得ぬ。Dには化石稀であるが中新世と斷ぜらるゝので鮮新中新の分界はC Dの間にあるのであらう。(横山)

○横山又次郎—加賀能登の鮮新世貝類(英文)

地質學雜誌三十三卷歐文九頁より十一頁

東大地質學教室採集品中、金澤市外大桑(オクラ)にあらでオンマとよむ、横山)の六種を同定したが多分武藏野系下部及白土層に當る時代と思ふ。能登の七尾附近のは八種で同じ時代らしい。Pecten perminusなる新種はホタテガヒに甚近いもので滅亡種である。別に其變種もある。(横山)

○神田正雄—南洋に於ける支那人 滿鐵マンフレット 第二十四號(十五年六月) 菊版三四頁

支那人の民族的發展は驚くべき勢力である。「若し人爲的制限が設けられて居らぬとすれば世界は到る處支那人の住居と化すであらう」と思はれる。革命派の軍資は多く南洋華僑より供給され、南支那の各地の宏壯な大學の施設は南洋の成功者の寄附によつて居る。

支那各朝の敗北者は内地では山間に隠れて土匪となり、外に向つては臺灣を初めフィリピン、ジャバ、ホルネオ、スマトラに海賊的行動に出て、異境に活路を求めた。猶支那に於ける革命の後には大抵二百年間平和が續くので、繁殖力の強い支那民族の人口は非常に増加を來たし、他に樂土を求むるの念は自然に湧いて來る。支那人の南洋に手を染めたのはオランダ、ポルトガル、スペイン等が競つて東洋貿易の利を占めんと東航し來つた十六世紀の初めよりは更に五六百年前であつた。而して十五六世紀には比支通商が大に發達した十七世紀にはマニラ、ルソン、ミンドロに移民した、十八世紀から誘致移民が行はれ、十九世紀に入つては勞働移民が從來の客頭の外白人會社で取扱ふ様になつた、一八八九年米國の支那人排斥の餘波を受けて一時頓挫した。

臺灣最初の住民は生蕃であつたが支那の人口過剰と海賊の探險とは確定的の領土のない臺灣に渡り今日の高雄、鳳山、臺南等に居を占め漸次北方の開拓をなしたものでらしい、是は明代の中頃であつた。而して次第に生蕃を山間深く逐つて了

つた。十七世紀の初、臺灣は和蘭人の占領に歸したが當時支那人の在留者二萬五千と稱せられる。其後三百年を経た今日臺灣に於ける本島人は三百五十萬に増加して居る。

支那人はスペイン人がフィリッピンに來る以前既に此の地で貿易を營んで居た、當時スペイン人は支那人の勤勉なるを賞して其渡來を歓迎した。フィリッピン征服の總司令官モンカン將軍は其著「フィリッピン事情」に於て「支那人なしにマニラの都市の存在を維持し能はざりき」と記した。然し一方では支那の海賊は掠奪を擅にもした。其後來寇も絶えて支那商はマニラで貿易に従ひ商界に勢力を扶植した。一六〇三年頃にはマニラ在住の支那人は二萬五千に及び、スペイン人の暴政に反抗して騒亂を起して以來支那人は支那人を憎惡したが全然支那人を放逐し得なかつた。十七世紀の中葉には支那人の數はマニラを中心として全島で三萬五千に上つて居た。然るに最近の調査に依るとフィリッピンが三百三十餘年西領であり、次で二十六年間米領であるに拘らず、在留外人の總數八萬三千餘人中支那人の數五萬五千二百餘人を占めて居る。スペイン政廳の迫害を受けながら今日の發展を見ることは支那人ならではと思はれる。マニラ市のロサリオ街の如きは全然支那街をなし其商ふもの、多くは綿布類、麻及雜貨である猶地方にゴム園、ヤシ園を經營し麻の栽培に従事するものも少くない。人爲の制限が無い限り支那人はフィリッピンで益々發展して行くに違ひない。

ホルネオはフィリッピンやジャバに比すると開明の遅い所

である、ホルトガル人もスペイン人も和蘭人も餘り此島は顧みなかつた、十六世紀に葡人及蘭人は來たが皆之を放棄した十九世紀の終頃漸く今の様に北ボルネオは英領に、西部ボルネオは英國の保護領に、東南部が蘭領と決つた。支那人のホルネオに來たのは葡人が來た以前更に五百年も前の事であるが、流行病が多いので餘り住居するものがなかつた、十八世紀に金鑽が発見され續々入込んで來た、而して西南部のモンドレードに本據を構へて共和國を創立し和蘭に反抗し一八五〇年から一八五六年まで戰爭し、直に支那人の政治團體が絶滅されたのは戰爭開始より三十四年を費した。支那人がホルネオに發展したのは他の南洋各地に比すると人爲的の迫害が少ないのと燕巢、麝香猫及金の産地である爲めである。支那人は今より七百年前に既にホルネオで砂金を採收して居り十九世紀の中葉には年採收額百萬圓以上であつたと稱される。現にホルネオに於ける製造業は多く支那人に依つて營まれて居る、又ゴム、ヤシ其他の農園は悉く支那労働者によつて栽培されて居る。従て蘭領、英領を通じて全人口中支那人は其大部分を占めて居る。ホルネオの一港サンダカンの如きは住民(一萬内外)の八割は廣東及福建地方から移住して來た支那人で、市街地は全然支那街と云つて可い。

ジャバは早くから文化のあつた所で、西曆初代數世紀から印度人、アラビヤ人と交通があり、支那人は其後入つて來、少くも六七百年前に相當の移住者があつたと思はれる。他の地では支那の労働者の移住が多いが此島だけは労働者の入園

が禁止されてゐるので、支那人のシヤバに入るものは商人が資本ある企業家である。支那人のシヤバへの來往の古い證據の一は現住民總數が一九一五年の統計で二十九萬五千餘人（今日は四十萬を超えて居る）中支那生れとシヤバ生れとを比較する時は後者の數が倍以上に及んで居る事である。支那人の生業の大部は商人で大都市には堂々たる支那街を設け、大商人は歐人と同様の邸宅を營んで居り、小村落でも必ず支那商が居る。最近の統計に依るとシヤバの主要都市に於ける人口の割合は次の如くである。

都市名	總人口	支那人	日歐人
パタビヤ	二五、八八	三五、〇〇〇	二四、五〇〇
スラバヤ	一、九二、五〇	三三、〇〇〇	一七、四七五
スマラン	一五八、〇三六	五〇、〇〇〇	一〇、一五一
スラカルタ	三四、八五	七、五〇〇	三、四八一
シヨクシヤ	一〇八、九一一	四、五〇〇	三、七〇〇
バンドン	九二、八〇〇	五、〇〇〇	九、〇〇〇
シヤバ全體を通じて重なる外國人の數を擧げると下の様である			
支那人	三八四、二二八	同歸化人	三三五
和蘭人	一二七、二二七	日本人	一、七三四
獨逸人	一、八五〇	アラビヤ人	二七、八〇六

支那人はシヤバ支配の歐洲人の歡心を得て勢力を擴大したばかりでなく、産業に於ても工匠及園藝は支那人の専門と云ふても宜しく、精米所の五分の四は支那人の手に在るし、多數の製糖工場も家具製作所も建築請負者も支那人が多いのは驚

くべき程である。更に農業者に對してもタバコカの製産は支那人の手に依り、又コーヒー、茶、ヤシ、ゴム事業等の資本を多く要するものには支那人關係が多い、されば支那人の所有地は少くない。シヤバの商業は大口のものは集散中心地であるパタビヤ、スラバヤ及スマラン（支那人の根據地）で歐人に依つて行はれて居るが、小賣商業は支那人の手に在る。支那人のシヤバに於ける經濟上の地位は既に強固で現在に於ては和蘭官憲も如何ともする能はず、寧ろ之を政治上經濟上に利用せんと計つて居、支那人は土人以上の優待を受けて居る。シヤバは獨り支那人の成功者を持つて居るのみでなく、臺灣人の成功者が少くなく、日本の民籍を有するもの、富豪が多い。従て支那人の勢力は偉大で、シヤバに於ては支那人は上流民族である。パタビヤ市のみで支那人の經營に係る新聞の數六（内三つは漢字、三つはマレー語新聞）の多きに及んで居る。

蘭領東印度中シヤバ及マドウラ以外のスマトラ、蘭領ホルネオ、セレンベス、蘭領ニウギニア及附屬島嶼を外部領地と稱して居るが、支那人の活躍は目ざましく人數に於て他の諸外國人に對し一頭地を抜いて居る。即ち支那人四二五、四二九 同歸化人二九三 和蘭人二六、八七二 日本人二、四一四 獨逸人一、五六二 アラビヤ人一七、一一五 キリン人一七、六二一 である。支那人は居住地に由つて生業を別にして居る。歐人は主として卸賣を扱ひ支那人は之を仲次する。ホルネオ西部では多く農業に従事し、スマトラ東岸では契約勞

働者となつて煙草ゴム栽培の勞役に服して居る。特に近來は勞働者にして支那から渡來して居るものが多いから實際は前掲の數より二割位は多からう。更に漁業に従事し又はバンカ及ピリトンの錫坑に勞働して居る。要するに外部領地には勞働者の多數が混ぜられて居て、將來成功の見込のあるものが多い。

馬來半島に居住する支那人の數は總計九十萬三千人と云はれ、其の内二十二萬二千六百人はシンガポールに住み、其の大部分は商業を營んで居るが、全體から見ると三分の二までは勞働者で主としてゴム園椰子園其他の農業に従事し猶ほ錫鐵等の鑛山、製材其他の機械工場、築港道路修築其他の土木、人力車夫、家内勞働及船乘に従つて居る。馬來に支那人の入込んだのは南洋諸島に移住したのと略同時代と思はれる。特に印度支那はもと支那の屬領であつて、河内は唐代には交州と稱されて都護府を置き安南一帯を統轄せしめ、ビルマ、シヤム等も支那に隸屬し、宋、元、明を経て清の初代迄、以上の政治關係は大體に於て變更されなかつたので馬來も早くから支那人の居住地となつて居た。然し馬來が支那人の多數に居住するに至つたのは馬來が英人の經營に移つてからの事である。特に三十年來馬來半島にゴム栽培が盛んになるに至つてから支那移民の團體渡航が年々二十萬も來る様になつてからの事である。渡航者の一部は勞働より得た金を本國に送るよりは其を貯蓄して小賣商を初め漸次富有となるのである。されば今日馬來半島の各地を訪ふとシヤバ以上

に支那人の横行濶歩するのを見受ける。現に馬來の總人口が三百萬人と云はれて居て、其の内馬來人が約百萬、支那人が九十萬餘、其他が印度人シヤム人ジャババ人歐人日本人等であるので數の上で大勢力な許りでなく馬來人に比べて支那人は貿易商雜貨商として到る處羽振りを利用して居る、支那人は猶農園の經營者として廣大な土地を所有し、製造工場の經營及錫鐵等の鑛山に關係するもの多く、紳士階級の多いに驚かざるを得ない。現に聯邦州議員には支那人が加へられて居る。馬來半島中央のスレンバン町の如きは特に支那人の成功者多く、英國政府からも特別待遇を受けて居る。シヤバに於ては支那人が日本人と同等の待遇を要求して居るに拘らずスレンバン市では日本人が支那人と同様の待遇を得られる結構との言を聞くに至つて支那人の馬來半島に於ける勢力如何を推することが出來やう。

之を要するに支那人の南洋に於ける地位は豫想以上に強固である。而も南洋に於て日支兩國人の提携は之を實現する可能性があり亦之を實行するは相互の利益である。(N)

飯盛里安—近江國田上山の放射能あるマンガ

ノキウル (Radioactive manganese nodules from Tanokami, Oomi Province. Sci. papers of the Inst. phys. chem. research. Vol. 4, No. 49, p. 79-83, 1926)

田上村キチシヨウの河床に弱放射能をもつた一種特有の黑色ノキウルあることを大正十一年に著者等が発見した。これは又山腹の岩石のさげ目を滿たしてゐることもある。これ

に淡緑色の粘土質のものが伴ふ、薄片を見るにアモルファスである。比重は平均二・七二。もろくて硬度は三位、色は褐色—銅灰色。樹脂光澤、時にコークス状。鹽酸で處理すると直ちに而かも完全に溶けて白色砂状のものが残る。この不溶解の部分には放射能がない。主としてマンガン及鐵よりなる。(定量分析及スペクトル分析の結果あり) 化學的方法では放射能性物質は見られなかつたがアルファレイ。エレクトロスコープで大略を測つて見るにウラニウムオキサイドの放射能度を百とすれば河床より得たものでは一・三、山腹より得たものでは二・〇の放射能度がある。ソツテイ式のエマネーションエレクトロスコープを使つてラザウムが可溶性の部分に含まれてゐる割合を測つて見ると河床より得たものは、 3.88×10^{-6} 、山腹のものは 1.26×10^{-6} で通常の火成岩に含まれてゐる割合の千倍にあたる。河床のもの、含有量の少ないのは流水の作用で失はれたものであらう。この放射能ある二次的の鐵マンガンの酸化物でインプレグネートされた岩石が出るところを見ると、以前にウラニウムを含んだ鑛物がこの地方にあつたらうと想像される。(渡邊)

○飯盛里安、吉村恂一邦産ルビヂウムの放射能度に就きて(理化學研究所彙報 第五輯 第二號 七三一—一頁 大正十五年)

放射能性元素の中でカリウム、ルビヂウムの兩元素だけでは全く系統が不明であり又その變率も全然解つてゐない。此等は極微弱なβ放射線を出すものであるが斯く放射能の非

常に弱いのは其等の成分たる二つの同位體即ちカリウムの K^{40} 、 K^{41} 、ルビヂウムの Rb^{85} 、 Rb^{87} の中で微量に含まれてゐる方のものゝみが放射能を有するためでないかと云ふ疑問がある。もしこの原因に由來するならば種類の違つた鑛物から得たもの或は同じ鑛物でも地質時代の違つたものから得られた材料に就て検査したならば或は著しく放射能の違つたものがないとも限らないのである。著者等の取つたルビヂウム抽出の法式は W. Mathmann のものを改修したもので五種のアルカリ金屬の全部が存在する場合に其固態混合物を先づ適當の濃鹽類を以て抽出してナトリウムの大部分から他を分離し次いでカリウム及びリチウムの存在に於てセシウム及びルビヂウムを分離するやうにした。田ノ上産チンワルド雲母の二種の標品について夫々〇・八一及び九八%の U_2O_5 を得、長垂産鱗雲母については〇・九六%を得た。抽出精製した硫酸ルビヂウムの弧光スペクトル検査の結果夾雜物として擧げ得るものはセシウムのみである。これについてカールバウム會社製品の呈する放射能度と比較するに必要な位の程度の放射能度の検査をα線箱放電計に用ゐて測定し之れを従來報告された諸結果と對照せむがためにβ線標準の放射能度を試料と略同じ層厚に於ける値に換算してみるに各一瓦の呈する放射能度は次の如くなり

β線標準 (U_2O_5) 1
カールバウム製硫酸ルビヂウム 一五三分の一

田ノ上チンワルド雲母

同

一五七分の一

長垂鱗雲母

同

一四九分の一

其放射能度に於ては從來知られたるものと大體に於て相違なきものと認められる。(渡邊)

○飯盛里安、吉村恂—長垂産鱗雲母の組成並に邦産雲母のリチウム含有量に就きて(理化學研究所彙報 第五輯第二號 八二—八五頁 大正十五年)

長垂産鱗雲母の總分析の外、美濃苗木及近江田ノ上のチンワルド雲母、伊勢石博、近江田ノ上、伊豫馬刀湯、甲斐初鹿野及石見三瓶山の黒雲母、伊勢石博及近江田ノ上及び三河乙川の白雲母、朝鮮咸鏡道の金雲母についてアルカリの定量分析を行つた結果。(渡邊)

新著紹介

○岩石鑛物及鑛床の顯微鏡研究

木下龜城著 菊

版四百頁、横組、索引付、大正十五年九月發行、目黒書店 價四圓

此は全く良書である。鑛物の顯微鏡的研究は正規に大學で實習した人でなければ實際今日まで近づき難かつた。所謂外國の原書といふものは語學に深く通じなければいゝもとき得ない。生物學方面に於ける顯微鏡の使用が今日廣くゆきわたつてゐるに反し鑛物學方面では残念ながら利用が一般には及んでゐなかつた。それは一に良き道案内になる本がなかつたが

らであつた。鑛物學岩石學書にも少しは顯微鏡使用法が記されてはあつたが不充分でさて實際にあたるさかゆい所に手がまどかなかつた。本書は篤學の本誌にも時々筆をさられる學團員木下氏の數年にわたる苦心の結晶である。氏は長らく東北の野に九州の山に鑛物の研究に三度の飯を忘れてゐた人だ。此本が悪からうはづはない。文章は平易で簡單でしかも極めて要を得て讀んで氣持のよいもの。全篇を分つてまづ顯微鏡の使用法をこく。此は光學の原理を巧に利用したもので進んで不透明鑛物の反射光線による觀察の法を説明し次に顯微化學研究法を説明す。此等の方法を利用した各鑛物の鏡下に現はれる特質も詳細に記し更に岩石を同様に研究し種々新らしい學說を加味す。最後に鑛床の顯微鏡下の特質を詳論す。此章は著者のもつとも得意とするところで大學の講義(今はどうか知らないが)にもないもの。だから本書は地質學入門の學生の好き參考書にまた文檢を受ける士の參考書になる(は勿論地質學専門家にもまた座右に置き備忘に役立つもの)。さくに私などは將來も盛に利用しやうと思つてゐる。さにかく良書である。日本最初の本である。我國の學問獨立の氣運に先ずるの書である。(M)

○臺灣地質鑛産地圖

縮尺三十萬分の一

臺灣地質鑛産地圖説明書 四六倍版二四五頁

臺灣總督府殖産局

大正十五年三月

明治四十四年に發行された臺灣地形地質鑛産圖並に同説明書は臺灣の地質及鑛産を總括記述したものであつたが、既に